◆本日のプログラム「RI 創立記念（アクト合同例会）」担当　理事会・新世代・国際奉仕委員会

◆ＲＩ創立記念（アクト合同）例会スピーチ　　長内　宏　パスト会長

　年齢と体調の故、出席義務免除を良い事に、心ならずも出席不良会員と化した長内で御座います。先日、中嶋会長、萩原幹事お二人お揃いでお見えになりましたので、愈愈、首の宣告かなと覚悟を決めたのでありますが、あにはからんや、代わりに「話に来い」とのご命令でありました。後期高齢者保健証を戴いて、認知症予備軍の私としては、誠に心もとない限りで、お断りするのが妥当かと思いましたが、まだまだ勉強を忘れるな！との激励のご忠告と受け止め、やって参りました。名簿を見ると、いつの間にやらクラブ暦の最古参となっている事に年を感じない訳でもありませんが、ＲＩ創立ローターアクト合同例会と意義ある例会に出席できる幸運を、わざわざご指名を戴いた事に会長、幹事様に感謝を申し上げます。

　ＲＣでは創立記念日を祝い、関連するスピーチを行うように推奨されています。わがクラブでもこの記念日にはベテラン会員が、ロータリーの創立に関連する講話をする事が慣例になっています。私もこれまで何度かお話をさせて戴いた記憶があります。併し、かなり前の事になりますので細かい事の記憶が薄れてしまい、内容が重複する事があるかと思いますが、お許しを戴き、少し話をさせて戴きたいと存じます。もう耳にたこが出来る事になるかと思いますのでご存知の古い会員の方々は、仮眠を取って結構です。

　ＲＩの創立　　１９０５年２月２３日夜、若き弁護士ポール・ハリスは３人の仲間とシカゴのディアボーン街にあるユニティビルの一室に落ち合い、ハリスが予てから，わが胸に暖めていた「ロータリーの構想」、「心を許しあえる仲間の集い」、即ち「職業の異なる実業人の定期的な会合」を提案了承され、これを記念してこの日をロータリーの誕生日即ち国際ロータリー創立記念日と定められたものであります。尚、別の表現をすれば、ロータリーNO．１クラブシカゴクラブの第一回例会という事になります。時にポール・ハリスは３７歳でありました。その日はミシガン湖に面する寒さの厳しいシカゴでも、とりわけ寒い夜でありました。イタリア料理店で夕食を済ませたポールは鉱山技師のガスターバス・ローアの事務所のあるユニティビルに、ローアと仕立て屋のハイラム・ショーレー、石炭商のシルベスター・シール、そしてポールの４人が集まり「友人として定期的に集まりお互い助け合い励ましあい相互扶助の精神を発揮して行こうではないか！」と持ちかけたのでした。何故子の様な考え方をポールが抱くようになったのか？これを解くためには、ポール・ハリスの生い立ち、そしてその当時のアメリカ特にシカゴの社会事情を尋ねてみなければなりません。

　ポール・ハリスの生い立ち（My road Rotary , The first Rotarian など参照）ポール・ハリスは 1868 年即ちきしくも日本では明治元年、シカゴの北４０キロにあるラシーンというまちに生まれた。併し家庭の事情により３歳の時、父母の元を離れ、アメリカ北東部のバーモント州ウォーリングフォードに住む祖父母の元に預けられる事になりました。勤倹質実、愛情豊かな祖父母の躾、そしてニューイングランドの美しい自然に育まれたポールは、その人格の大部分はこの時に形成されたのである。その後、大学へ進み更に法学部へと進学、法律家としての準備を整えていった。更にポールの人生に大きな影響を与える事となったのは後年、彼が「５年間の愚行」と呼んだ放浪の旅に出かけた事である。世の中を知らない為、色々な世界を経験しようと、この旅はアメリカ大陸横断は勿論、遠くイギリス、ヨーロッパを巡る大掛かりな旅でその間色々な職業、即ち新聞記者、俳優、果樹園労働者、果てはカウボーイ、貨物船の下級船員などなど。後年、ポールはこれを回顧して、寒さに耐え，飢えに苦しみ、全く自分一人の力を頼りに生きたその５年であった。悪の真っ只中にも善があり、荒涼として頼るもののない中に豊かな友情があったと述べている。この得がたい経験がロータリー発想の原点の一つになったであろう事は間違いない。１８９６年ポール・ハリスはシカゴの地にて法律事務所を開設した。

　シカゴの当時の時代背景　　１７世紀にはミシガン湖畔の小さな船着場に過ぎなかったシカゴは、１９世紀末にはニューヨークに次ぐ大都市に成長し、多くの移住民が集まり、貧富、善悪始め種種雑多の要素を包含する発展都市であった。と同時にシカゴは悪徳と退廃の街であった。後年、イタリアの移民である大親分アル・カポネが、禁酒時代の暗黒街の帝王として名を馳せる街になった事は良く知られて

いる。１８７１年このシカゴは大火災に見舞われ、街は灰塵と化した。１８９３年の万国博覧会の好況の反動のように大恐慌がアメリカ全土を襲い、企業倒産続出、失業率２０％、４００の銀行閉鎖、シカゴ川は悪臭紛紛の汚濁の水辺となり疫病の流行、犯罪の多発など目を覆う惨状の街と化していた。人心は荒び、悪徳商法がまかり通って、偽物を掴まされるのは売り手が悪いのではなくて買う方が馬鹿だからという始末である。ハリスの回顧文のなかで“当時の大半の実業家は自己保全第一で行動していた”と語っている。この様に弱肉強食、最低の商道徳の暮らしの中で、新参者ゆえ友人にも恵まれなかったポールは非常に素朴に、心の孤独を癒し、ヒューマンで親密な友情を取り戻す為の実業者の集まりが出来ないものか？という考えに到達したのである。そして敵対的競争の起こらない様にする為、職業の異なる実業人の集まりであれば夫々の商売を利用し合う事により、相互扶助という利益をも確保する事が出来ると考えた。そしてこの考えを５年間暖めていたのである。正に１９０５年という時代は、ロータリーの成立にとって絶好の時であった。ポールは後年ロータリーの「理想と友愛」の中で当時を回顧して“ロータリーの発芽期にとって２０世紀初期は、絶好の時期であり、またそれを育成して確固たるものにする土地として攻撃的で、男性的で、エセ理屈の多いシカゴほど適切な都市はなかった”と述べている。雑談ながらこの１９０５年にはアインシュタインが「相対性原理」を発表し、その２年前にはライト兄弟が飛行機を飛ばし、２０世紀の科学的大発展を予測させるが如き出来事が起こって、又、１９０５年を日本流に名乗れば明治３８年であるがこの年、漸く明治維新を成し遂げた小国日本が、ロシヤの南下政策の為、国家存亡の危機に直面し、国民の不安は頂点に達していた。明治の日本国民はこの時、明治朝廷を中心に一丸となって決死の覚悟を固め、国運を賭して世界の大国ロシヤと戦端を交える事となった歴史的な年でもある。２０３高地の激戦、奉天大会戦、そして東郷元帥率いる連合艦隊が日本海海戦において、奇跡の大勝利を成し遂げ、ロシヤの魔の手から辛うじて脱出出来たのであった。日本海海戦が練りに練ったＴ字戦法により見事その勝利を勝ち得たと言われるその戦法は？私はこの事に興味を持って少し調べたことがあり、こちらの方が得意なのですが・・・

ロータリーの発想，その思考　　現在のロータリーの発展は目覚しく、ご存知の如く世界に広がる巨大な組織となり、立派な定款細則によって構成されています。奉仕の理想実現の為、世界のロータリアンは日々、各分野に亘って額に汗し真摯な努力を続けて居ます。併しこれは、ロータリー１００の歴史の中で多くの先輩ロータリアン達が厳しい自己反省と社会への奉仕から試行錯誤と苦闘の末出来上がったものであります。その長い道程の中ではロータリーそのものが分裂の危機に面した時さえあったと言われています。日本のロータリーに関してみても、かの大東亜戦争（グローバルには太平洋戦争あるいは第二次世界大戦）の間、日米の国交断絶により日本の各ロータリークラブは国際ロータリーから涙を呑んで脱退、戦後改めて再復帰を成し遂げています。ロータリーを発想したポール・ハリスの頭の中には、始めは極く素朴に、大都会の中での孤独を癒し、心を許し合える友人、そしてお互いの仕事も助け合う事のできる関係での友達を何とかして得たいという気持ちが、その原点であったと言われています。所謂相互扶助の集団と言えるかも知れません。その事柄などについては沢山の逸話があり、又、ロータリー思想がその後どの様な過程を経て昇華され、奉仕の理想まで辿り着いたか等多くの歴史と教訓、教材があります。これについてはロータリー情報委員会やその道の先輩にお願い致したいと思います。

只、ロータリーの始祖であるポール・ハリスの崇高な思考に就いて，如何に彼がこの一連の活動と更にリーダーとしても最も相応しい人物であったかを示す「片鱗」をお伝え致します。以下、ポール・ハリスの著書「ロータリーの理想と友愛」の中に書かれている彼自身の語録です。

ロータリーは代表的実業人及び専門職業人の集まりで、奉仕のロータリー哲学を信じ、事業の真正な成功並びに幸福の基礎として奉仕の理論を考察しようと発起したものであり、その地方における明確な事業または専門職業より一人をとるものである。各自はその職務及び日常生活のうえにこの理論を移し、個人としてまたクラブとして発動的教訓または例証をもって、ロータリアンは勿論会員外のすべてに理論上実際上にこの信奉を奨励するものである。ロータリー会員各自が、その国家に対しては忠実な国民として充分に各自の能力を表し、使用人、取引先その他事業上の関係者に対しては適正な処理を怠らず、こうして個人として、またロータリーを通じて、奉仕の理想を行う実業および専門職業人の世界的交誼により国際平和を感得せしめることを期待する。

ロータリーは宗教団体ではない。ロータリーはいずれの宗教にも干渉しこれに代わろうとすることは考えない。

奉仕の理想とは何を意味するか、それぞれ言葉は異なるが精神は一つである。
エジプト人曰く「己の欲する善を他人の為に求めよ」。ペルシャ人曰く「汝施されんと欲する所を施せ」。仏陀曰く「人は己の為に欲する福善を他人の為に求むべきなり」。孔子曰く「己の欲せざる所を他人に施す事なかれ」。ナザレのイエス曰く「汝他人より与えられんと欲する全てを他人に与えよ」。

多くの専門職業に従うものの奉仕がその注文に対して引き合わない子とがる時、他方においては法律、医学及び神学の学生は、その従事する職業には必ず遵守すべき義務の付随するものである事を教えられているのである。弁護士は正義の支配下にある法廷に仕える公人である事を記憶せねばならない。医師は何よりも第一に人類の公僕でる事、宗教家は神聖なる受託者である事を記憶せねばならない。

私が個人的に密かに思うに、ロータリー思想はアメリカ的合理主義によって裏付けされたものであると言われています。が、ポール・ハリスの頭脳の中には、西欧的宗教思考は勿論であるが、更に同じ位多くの東洋的思想が包含されているように思えてならないのである。

堅い話になってしまいましたので，閑話休題！次に私の個人体験談に移ります。

シカゴにおいて開催された「ロータリー創立７５周年記念世界大会」の想い出丁度３０年前の１９８０年はロータリーが誕生して７５周年を迎えるに当たり、これを記念にしてシカゴに里帰りして盛大に世界大会が行われました。時に私はまだ５０歳前の若者、丁度２年後に会長に指名される事となっていた為、若干ロータリーの勉強が必要であった事、何よりも我がクラブの神様「両角克治大先輩」から７５周年というのはクウィーンジュビリーといってアメリカでも特に目出度い年に当たるので、是非出席するが良いとお勧めを戴き、意を決して初の世界大会出席となった訳です。何と言っても全て初体験、３０年も前の事となってしまいましたが、その時の想い出を振り返りたいと思います。ＪＴＢの募集するロータリーシカゴ大会、Ｇコース一行４４名は昭和５５年５月３０日夜、勇躍成田を出発、サンフランシスコで一泊の後、アメリカン航空でシカゴ・オヘアを目指し離陸しました。上空でティータイムが過ぎ寛いで間もなく、英語の機内アナウンス「ドクター！ドクター！」と呼ばれては、英語が解からずとも言えず、何よりもロータリー国際大会参加の身の上、「真実かどうか」に照らし、恐る恐る「Ｉ　ａｍ　ａ　ｊａｐａｎｅｓ　ｄｏｃｔｏｒ」と申し出ました。アメリカ人スチュワーデス嬢、お前本当か？という様な顔をしながら、トイレの前に倒れている日本人らしき中年女性の所まで案内されました。間もなく連れの男性（これが我が一行の仲間）が現れ、家内は先ほど出されたジュースを飲んでからフラフラすると言ってトイレに行ったんですとの申告。　それだ！難問正解！実はジュースの中にチョッピリ、アルコールが入っていました。　奥さんは全くの下戸！一過性のアルコール中毒です。暫くすれば回復するでしょう。で任務終了！やれやれ先が思いやられるか？併しこの一件で東京板橋クラブのその方（弁護士）とご交誼を戴く事となりました。

さて、愈愈シカゴに着きました。宿泊ホテルはハイアット・リージェンシー・シカゴ。かつては汚濁と悪臭の川と言われたシカゴ川の南にありました。すぐ近くの船着場の上にはトウモロコシタワーと言われる２棟の高層ビルが目を引きます。記念世界大会は少し離れたマコ―ミック・プレイスという大きな展示施設で万余のロータリアンが集い盛大に執り行われました。前夜祭は確かシカゴの歴史とロータリーの発展史を歌劇にしたようなものだったと記憶しています。テネシー出身のジェームス・エル・ボーマ・ジュニア会長の下、数々の記念行事が行われ、友情の交換、明日への更なる奉仕の実現を誓いロータリーの感激を味わったのでした。偶々、隣り合わせたアメリカ人と職業の話となり、相手は「ｆｕｎｅｒａｌ　ｄｉｒｅｃｔｏｒ」だという。ぴんとこないので良く聴くと、葬儀屋さん、送りびとである。ディレクターと称するのも社会性の違いなのか？などと自問自答しながら、医者と葬儀屋が隣合わせとは又、縁は乙なものと苦笑せざるを得なかった。自由時間を利用して先ず訪ねたのは、シカゴ市庁舎である。ポールの時代、相互扶助に留まらず社会に何らかの奉仕を考えねばならないという反省が起こり、ここに公衆トイレを寄贈した事が社会奉仕の最初の事例となった。そしてそこから程近い、ディアボーン・ストリートに建つユニティ・ビル。ロータリーＮＯ．１シカゴクラブの初めての会合が持たれた場所だ。古びた１４．５階建てのこのビル、これまた古色蒼然たるエレベーターは見るからに年老いたエレベーターボーイが運転する箱に乗って、かつてのシルベスター・シールの事務所である一室へ。そこは既にロータリー記念室となっていた。小さな部屋の壁にはポールの写真が一枚、一脚のテーブルの上には、ポールが愛用したという古い鼻眼鏡が一つ、その鼻眼鏡を手にとって鼻にかけた時、ポールの熱い血潮と初会合の時の感激が伝わってくる瞬間であった。翌日、シカゴ中心部からやや離れた、エ

バンストンにあるＲＩのヘッド・クォーター事務局を訪ねた。大きなロータリーのシンボルマークと所狭しと立てかけられている各国の国旗、事務局機構や世界中のロータリアンの分厚い登録簿などを見せて戴きサービスを受けた。併し残念ながら今は時のユニティビルもヘッド・クォーターも取り壊されて姿を消してしまった。訪問時のシカゴは街中も整備され、ミシガン湖に面する港には沢山のヨットが浮かび高層ビルが連立する美しい商業の一大拠点である。シカゴの街の発展と暴力の追放にその健筆を振るったといわれるシカゴ・トリビウーン紙のトリビーンタワーがその古さと権威を着飾ったように建つ。当時世界一のノッポビル、シアーズ・タワーは４００Ｍを超えてそそり立っていた。大会出席の後は、ニューヨーク、ワシントンと旅は続く・・・

　思えば昨日のような、併し記憶も定かならざる３０年前の事だけど。このロータリーに入会を許され、会員としての特権があればこそ味わえる幸福であると心から感謝申し上げ、つたない講話を終える事と致します。ありがとう御座いました。

ご清聴を感謝しつつ。